あおいまにの風

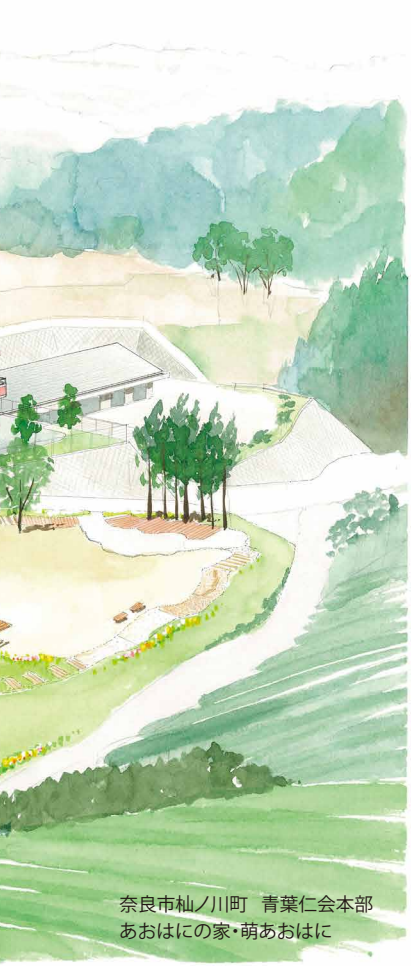
法人設立30周年記念号

Vol.6 2022 春

青葉仁会 設立30年の節目を迎えて

事業所より～ たくさんの成長の機会を共に

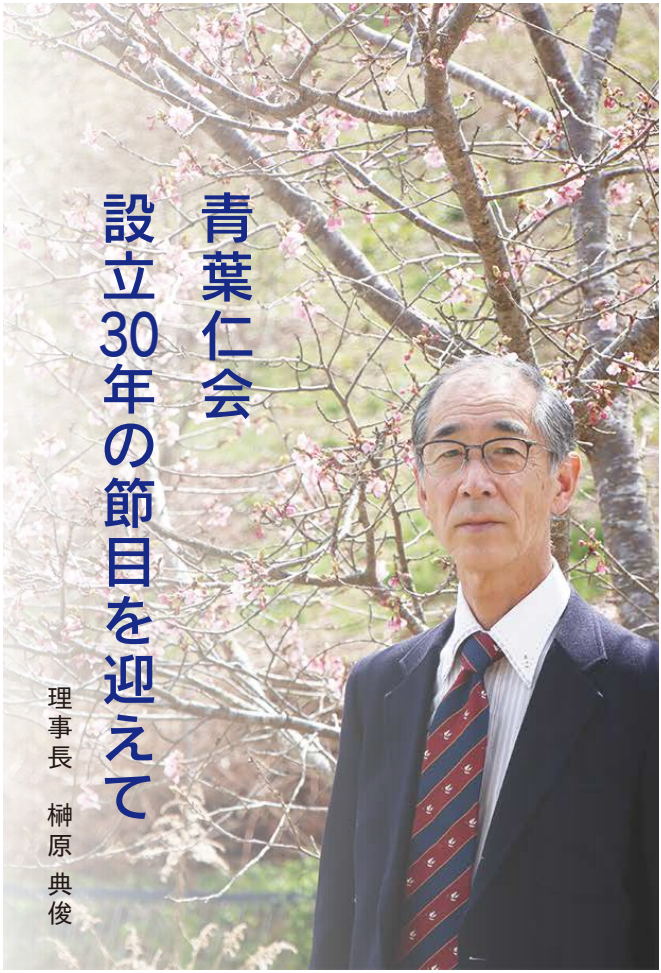
Memoir おもいで



奈良市杣ノ川町　青葉仁会本部
あおはにの家・萌あおはに

青葉仁会
設立30年の節目を迎えて

理事長　榊原 典俊



月日の経つのは本当に早いものです。「あおはにの会」が「社会福祉法人 青葉仁会」になってから30周年を迎えました。これまで本当に多くの方々にご協力頂いた事に感謝すると共に、青葉仁会での過ぎた日々をしみじみと感じるところです。「日は昇り　日は沈み　年月はまたたく間に過ぎ去る　喜びや涙をのせて　矢のように」。これは『屋根の上のヴァイオリン弾き』の歌詞ですが、まさに私にとっては矢のように過ぎた日々でした。

思えば、社会福祉施設での勤務経験もなく、社会福祉法人制度すらも分からずにただ、教員として障害のある生徒達が卒業後に出る場所があり、する事があり、普通に暮らす事ができれば、との思いから始めた事でした。30数年前は、多くの障害のある方々にとって、学校にいた期間こそが社会参加であって、卒業と同時に行き場を失い、行政の措置がなければ福祉施設を利用することも困難でした。従って、結局は在宅を強いられ、社会から孤立してしまう方が大勢おられた時代でもありました。

本来は、発達に障害のある人にこそ手厚く、より期間の長い教育の機会が必要であることは言う迄もありません。にも関わらず、その彼らから真っ先に発達の機会が奪われていきました。さらには自分の生き方や、社会での可能性に向けてチャレンジする機会も十分に恵まれず、それらは「保護」という見えない檻によってその事が正当化されていました。確かに、チャレンジし、人生を築いてゆく事は誰にとっても大変なことであり、容易でないことかも知れません。しかし、その機会すらも与えられないままに人生が終わっていくのをただ待つだけの人生はもっと苦しいものです。何をする目的もなく、必要とされることもなく、人と分かち合うことのない人生をマザー・テレサは「誰からも愛されず、必要とされない。この心の痛みこそが本当の飢え」と言っています。

振り返れば、団体の立ち上げから今日まで、数々の課題や問題が途切れることなく現れ、今なおその泡沫の間に浮き沈みして

いることに何ら変わりありません。今回、法人設立30周年といっても、特別な感慨が湧いてくる心の余裕とまでは至らないのが本音です。しかし発展とは、現在の安定の上にあるのではなく、不安定なリスクの先に創り出される未来ではないか、終わりの見えない途上にいつもあると思っています。

30数年の月日で何よりも思うのは、１９８０年「あおはにの会」立ち上げ当時、８名いた仲間のうち、今なお私を含めて5名の職員が元気に青葉仁会で活躍していることです。お互いに顔を合わすと、さすがに時の流れの変容ぶりはそれなりに感じるところですが、相手もさぞかし私に対し同じことを思っているだろうと察せられます。その5人もそれぞれに、指折り数えてあと何年と胸の内で思っている事でしょう。しかし彼らには、この30周年の機会にこそ、もとの「始まりが何であったか、どの様に取り組んで来たか、どんな出来事があったか、忘れられない人達や出来事・・・」などをこれからも続く人たちに伝えてほしいものです。

伝統とは語り継がれることにより築かれ、ぶれることのない未来を指し示してゆくのではと思います。そして次の時代もまた、30数年を共にする仲間たちに恵まれる豊かな組織であってほしいと願うばかりです。

さてその8名の職員から始まった組織も今では３００名を超える職員に恵まれ、生活支援、就労継続支援、地域生活支援に結束して取り組み、他にない魅力づくりに研鑽しています。その積み重ねは、今回の新型コロナウィルス対応の苦難のなかでも、感染症対策で制限された生活環境での食を支えるため、お惣菜や常備しておけるレトルト食品などを通して如何なく発揮されました。コロナ禍では、皆さま同様に我々も大変な思いをしておりますが、他方で【共生社会】の実現に向けてのはずみとなりました。例えば災害時には、施設の就労支援をもって地域へ食料の供給に関する協定も結んでいます。また、関西圏の１００箇所を超える「こども食堂」へ、たくさんの青葉仁会の就労生産品が提供され、喜んでいただきました（本誌25頁詳細）。【共生社会】の促進は食品だけではありません。美を意識されるご利用者の憧れの仕事として始めた化粧品石鹸事業も、感染防止のこまめな手洗い、特に自然素材での手荒れ対策に一役果たすとともに、柚や米こうじ石鹸などは、企業との連携を通してヨーロッパにも輸出され、日本の特産物として関心を高めています。また農福連携の活動においても、中山間地域での持続可能な農業への取り組みにより『農福連携等応援コンソーシアム』から、『あおはにファーム』が「ノウフク・アワード２０２０審査員特別賞（地域を耕すの部）」を授与されました。その他、生活介護支援の芸術・創作活動においてもご利用者数名が賞を受け、信州にある『安曇野ちひろ美術館』では、愛らしい羊毛フェルト商品が販売され人気を得ています。このように、コロナ禍にあっても明るいニュースを提供することができました。

30年という月日のなかで、これまで障害

者支援事業に特化してきた道のりがご利用者の社会参加や希望に、そして地域の人々の幸いにつながっているなら支援者としてこの上なく幸いと存じます。我々一同だけでなくこれ迄、青葉仁会の活動を支えて下さった方々にも感謝の気持ちをこの機会にお伝えすることができれば何よりです。

これで青葉仁会は完成した、と言うわけではありません。足元を見れば、施設の老朽化や、より支援が必要な方々への対応、地域の高齢過疎化、それに伴う支援や社会状況の変化に合わせた活動の転換など・・・待った無しの状況下にあります。この度30年の節目に、本部・仙ノ川の近くにある五年前に廃校となった小学校を取得いたしました。廃校とは思えない風情の立派な校舎と、広い運動場、別棟の大きな体育館など、今までにない可能性を広げこれらの課題解決の一助になればと思います。今のところ、ここでの第一期の事業として、就労支援ではレトルト食品の加工場、またそれに伴う地域の農産物の加工場を考えています。たくさんある教室をそのまま活用し、自立支援事業による社会教育の場なども併せて計画しているところです。運動場や体育館を使った活動や地域イベント、自然豊かな地域で子供たちの自然体験など、多様な活動拠点として社会に役立てるよう、青葉仁会のご利用者の益々の活躍を願いながら進めていくことで、設立30年のひとつの節目になればと思います。今後とも、皆さまのご支援のほど宜しくお願い申しあげます。

取得した（旧）六郷小学校

新型コロナウィルスが圧倒的な感染力をもって広がっている中、皆様がたのご健康をお祈りいたします。

たくさんの成長の機会を共に

あおはにの家

副所長
永原 克彦

私たち『あおはにの家』入所施設は、北棟に男性2小舎と、南棟に女性1小舎との2つに大きく分かれています。令和3年4月より、12名の方々が新設された日中サービス支援型グループホーム『はれやかホーム』へ移られ、それを機に12名の方々が『あおはにの家』へ入所され、新たに私たちの仲間となりました。現在『あおはにの家』全体では、53名の方々が入所されておられます。

猛威をふるっている新型コロナウイルスの影響で、令和3年の1月から9月までは、各フロア単位での日中活動が続き、10月より野外作業班と屋内作業班とに別れました。今年、屋内作業班は『あおはにの家』と『萌あおはに』に分かれて、3つのグループで作業に取り組んでいます。密を避けるために中断していた音楽療法も復活し、取り組む事ができました。夏には、心配していたワクチン接種も無事に2回終えることができました。

感染防止対策でご家族のもとに帰省が出来ない日々が続く中、今年も入所では趣向を凝らして様々なイベントや余暇を実施しました。ゴールデンウイークには鯉のぼりイベントを企画し、フロアで協力してたくさんの鯉のぼりを作成しました。広場や建物に飾り付けた鯉のぼりが気持ち良さそうに青空を泳いでいる姿を見上げて「わぁ、すごいなぁ」と喜ばれる利用者さんの姿が印象的でした。6月には、近隣のめえめえ牧場と布目ダムへお弁当を持って出かけました。皆さん久しぶりのバス外出で、明るく楽しい気分になり、また新しく入所された利用者さんも先輩方と充実した時間を過ごされました。7月には、ビアガーデンを開催。ノンアルコールでしたが、みなさん大人の雰囲気でイベントを楽しまれました。8月には「防災DAY」を実施。フロアごとでご参加いただき、避難器具を使った避難を体験、また災害用の非常食をおやつとして試食もして頂きました。10月には去年に引き続きオータムカーニバルを開催。新型コロナウイルス対策で入所ご利用者のみでのイベントでしたが、この状況だからこそ出来るイベントを実施できました。またこれらのイベントに向けて、日中活動でイベントの装飾や備品の作成に皆なで取り組みました。イベント当日、ご利用者が「これ、私がつくってん!」と誇らしげに話されていることがありました。日頃の作業の成果をみんなに見てもらうことで、ご本人の誇りや、やりがいにつながっているのだと改めて感じました。発表や展示する機会をつくることがやはり大切なんだと感じられました。

これからも引き続きご利用者とともに楽しめる取り組みをしていきたいと思っています。

萌あおはに

職員　中道さおり

青葉仁会の入所施設『あおはにの家』・『萌あおはに』で大切にしている「暮らす」「働く」「余暇」の中でも、「余暇」は、比較的年齢層の若い『萌あおはに』でとても大切な要素を持っています。「余暇」は、ご利用者が新たな楽しみを発見し、はつらつと、自分らしく、明るく日常を過ごし、また明日への活力を養ってくれます。そのような行事やイベント、クラブ活動やフロアごとの週末余暇が『萌あおはに』にはたくさんあります。このような「余暇」はまた、ご利用者同士や職員、外部の方との交流や活動を通じたくさんの成長の機会でもあると私たちは捉え、支援に取り組んでいます。

この二年近くの間は、コロナ禍のもとで様々な行事やイベントなどの余暇が内容を変更して行われてきました。徐々に音楽療法やメイク療法、外出してのランチ企画などが、基本的な感染症対策に留意しながら再開されつつありますが、まだ以前のような規模で行うことが難しい状況です。

しかし、現在のような危機的な状況だからこそ、新しい生活様式に適応され、周囲の仲間や職員と共に成長されるご利用者の人間性の素晴らしさを実感できたことは、他の何物にも替えがたい、私の人生の宝物です。フロアでの消毒作業や換気のための窓開け、手指消毒に積極的に協力していただける方、困っているスタッフや他のご利用者を優しく気遣ってくださる方、そして手を貸してくださる方など、周りの困っている人を放っておけない、多くのご利用者の方が発揮されている人間性の素晴らしさが、コロナ禍の中で白く輝く希望のように明らかになりました。

今後、共に成長することによって、自然環境、社会環境の変化を乗り越え、新しい行事や帰省のあり方を模索することができれば、現在は規模を縮小して行われている春のバーベキュー大会、夏の七夕や夏祭り、秋の国立曽爾少年自然の家への宿泊体験やハイキングなどの楽しい行事が、時代に合わせた形でまたさらに楽しく行われる日が必ずくることを、私は信じています。

あおはにアート・クリエイト班

笑顔になるものづくり

主任　中谷有香

昨年に引き続き、感染症対策のため通所と入所は別々で活動をしています。けれども作業を分担し、創作、羊毛、それから綿花の作業にも取り組んでいます。

「イロトリドリ」に「フクフクドリ」― これはＡＯＨＡＮＩ・ＡＲＴを代表する商品の名前です。東京の雑貨屋さんや長野県の美術館でも販売して頂けるようになりました。羊毛をゴシゴシこすってフェルトにし、チクチク刺繍をいれて綿を詰め込んで縫い上げます。ベテランの技を見せてくださる方も、新しく仲間に加わりお仕事を覚えていって下さる方、そして、こんなのはどう?と新たな提案をして下さる方、皆さんでできるお仕事を分担し、力を合わせてひとつのブローチを仕上げていきます。

昨年から新たに始めた取り組みは『あおはにファーム』班で育てた綿花の加工です。綿花の作業はとても細かく手間がかかりますが、ゆっくり取り組むことができるので、それぞれのペースに合わせてチャレンジしています。今年は紡いで糸にすることができるようになりました。更に糸を玉ねぎや朝顔、栗やお茶で染めて織りにして試作をしています。さぁこれからどう商品化していきましょう。

「イロトリドリ」のようにカラフルでワクワクするような、「フクフクドリ」のように福を届けて笑顔になるようなものづくりを、利用者さんと力を合わせて取り組んでいきたいと思います。

あおはにファーム

副所長　本間 知雄

今年も春から秋にかけて主にお米（コシヒカリ）、じゃがいも（キタアカリ、メークイン）、さつまいも（紅はるか）栽培をメインに活動しました。また、今年から大阪のとんかつチェーン店「かつ辰」様にキャベツとコシヒカリ米の納品も行っています。

（25頁参照）

秋には来年の春以降に収穫予定の玉ねぎ苗の定植も行いました。さらに今年のあおはにウインターギフトから、自然学校班で栽培したブルーベリーを使ったブルーベリーワイン（SOMA BLUE ソマブルー）の販売も行っています。とても好評でギフト開始から発注をたくさんいただいています。

今年も、感染症拡大の影響で当法人内の特に飲食部門や世の中では様々な仕事に影響が出ている中、あおはにファームは例年以上に忙しい日々を送りました。農業活動は人々が生きるための根幹である「食」を支える重要な仕事であり、また社会から必要とされていると実感するとともに、それがとてもありがたいことであると利用者さん、スタッフ共々あらためて感じています。

来年はさらに良い品質の野菜、お米を栽培できるよう、冬の間に準備を進めています。

水間ワークス
ひとつひとつ、積み重ねた成果

主任　落合 智哉

障害のある方々が、接客などのサービス業に携わることなどが想定されていなかったその時代に、さきがけとして始まった『カントリーカフェハーブクラブ』。そのハーブクラブを中心として、『瓶詰加工班』、『どんぐり山猫工房』を合わせた、『水間ワークス』は開所25周年となりました。

現在、このコロナ禍でハーブクラブは感染拡大防止策として休業を繰り返す状況であり、それとは知らずに足を運んでいただいたお客様の残念そうな表情を見ると、申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

しかし、一方で開所以来ご利用者がそれぞれの役割を担われ、その活躍ぶりを見られたお客様が、お食事やサービスだけではない何かを感じ、ご利用者の、またハーブクラブのファンとなって頂いている事を改めて認識する機会ともなりました。

休業中は、ジャムなど瓶詰商品やOEMで受注した赤紫蘇シロップの製造、ここ数年で主力商品となったあおはにファーム栽培のサツマイモ（紅はるか）の干し芋製造など、自家農園の農産物の加工も一体となって取り組んでいます。バジルや紫蘇の葉の選別、蒸したサツマイモの皮むきやスライスなど、機械化が難しい作業も多く、ご利用者の一つひとつ丁寧な手作業なくして、今年度のスムーズな商品の製造はあり得ませんでした。

食品に限らず、どんぐり山猫工房の木工商品もまた、職人技をひとつひとつ積み重ねた成果であることをあわせて考えると、水間ワークスのご利用者の手しごと作業の力は非常に大きく、とりわけ農業を中心とするこの山間地域の資源活用、魅力の活性化へ向けた私たちの取り組みは、年々増してきているように感じます。

満天ひろば
沢山の可能性に溢れ

主任　大家 直

法人設立25周年当時、『満天ひろば』に所属されるご利用者の人数は14名。その後多くの仲間を迎えて、現在は35名のご利用者が所属しています。若い世代から沢山の刺激を受け、益々溌溂としてきたアダルト層。頼りがいのある大先輩から叱咤激励され、少しずつ社会人の心構えを勉強してきたヤング層。この絶妙なバランスが『満天ひろば』を支え、沢山の可能性と伸びしろを生んでいます。

昨年度末、縫製・石鹸・店舗運営の既存事業に加え、「笑顔と体力とやる気」を商品にした「コンシェルジュ班」を立ち上げました。他班への繁忙期人材派遣事業をはじめとした法人内の「お困りごと」を解決するサービス事業で、『満天ひろば』に留まらず、縦横無尽に班の垣根を飛び越えていく集団です。今年度は主に『あおはにファーム』、『自然学校』への畑作業派遣に加え、『デリカテッセン・イーハトーヴ』の出荷業務に携わる等、少しずつ仕事の幅を増やしています。他班の仕事に触れる機会が増えると、そこには班を越えたご利用者同士、職員同士のコミュニケーションが生まれます。そこからさらに新しい発想が生まれ、新たな仕事を作ることができました。

沢山の可能性に溢れた満天ひろばは、良い意味で型にハマらず、今後も拡縮自在に事業を展開していこうと思います。

5年前に、法人の25周年記念事業として立ち上げた「満天 星めぐり石鹸工房」の活躍については本号の21頁22頁に特集がございます。ご覧ください。

日笠ワークス
達成感、一体感を大切に

職員　藤岡 葵

令和3年4月には、もともと日笠ワークスへ『あおはにの家・萌あおはに』の入所から日々通所されていた6名のご利用者が、新設されたグループホーム『はれやかホーム』に引っ越され、そこから日笠ワークスへ通所されることになり、気持ち新たに1年をスタートしています。紙漉き班としては定期的にご注文いただく商品の生産、オリジナル商品の製作などに取り組んでおり、今年度から、紙を漉く班と加工する班の作業場を分けて作業しています。作業をより細分化し、それぞれの工程、役割を経て一つの商品を作り上げる達成感や一体感を大切に、今年もカレンダーなど新春商品の生産に励まれました。

一方『アート&カフェ水仙月』は、今年は昨年以上に感染症対策のために休業している期間が長かったものの、その間に菓子製造業の営業許可を取得し、地元大和茶、そしてあおはにファームの野菜をベースにした食材を使用したわらび餅や芋ようかんなど和菓子を中心に生産・販売を始めています。他事業所などへ少しずつ納品をはじめ、地元の市場やイベントなどへも納品させていただいています。休業中に、ご利用者さんのスキルアップを目的とし和菓子作りに取り組んでいただき、計量からパック詰め・シール貼りなど火を使う作業以外はご利用者さんが主体で取り組んでいただけるようになりました。今後も季節感を感じる和菓子を開発し、ご利用者さんがいきいきと活躍していただけるような支援をしていきたいと思っています。

デリカテッセン・イーハトーヴ

やりがいと楽しさを感じ成長

課長　中井 喜代子

スーパーの空き店舗を利用してデリカッテッセン・イーハトーヴが就労移行支援事業として開所した平成20年9月から13年。

特に近年は、コロナ禍により奮闘に満ちた時期となりました。

コロナで外出・外食が制限される中、デリカではお取引先の飲食業界への商品出荷が急激に減る事態に。一方、「おうち時間」が多くなった人が、ご自宅で手軽に食べる事のできるレトルト食品や冷凍食品が、コンビニやスーパーで大きな割合を占めるようになりました。そんな折、デリカが長年かけて培ってきた多様なレトルト食品製造の実績をもとに、その頃取引が始まっていたお得意先とも良い関係を築く事ができ、現在は新しい商品と大量の製造に奮闘する毎日。

また夏休みや冬休みの学童への弁当配達の依頼も年々増え、住宅街の中にあるというデリカの地域性もあり、高齢世帯への宅配弁当の依頼も定期的にいただけるようになりました。安心して食べられるお弁当は好評をいただいています。

飲食店の『Ｓｏｒａ』は、感染防止のためカフェ業務を停止せざるを得ない中、店頭での手づくり弁当・惣菜・テイクアウトメニューを充実。地域住民のヨリドコロとして欠かせない存在になっています。『ベーカリーＧｉｏｐａｎｎｉ（ジョパンニ）』は現在も閉店中であるものの、隣接する『Ｓｏｒａ』に毎日決まった時間に焼き立てのパンを日替わりで提供し、お店の前を通る方、お客様の鼻をも楽しませています。

また、今年度は子ども食堂への食材提供事業にも携わらせていただくことができ、たくさんの感謝の声もいただきました。

この2年間はご利用者さん、スタッフにとっても大きな変化を伴う時期でした。工賃を確保する為の商品企画、ご利用者さんが安心・安全に通所できるよう送迎体制も大きく整備されました。そして全ては皆の協力が無くてはできなかったことだと思います。これからもご利用者さん、スタッフ共にやりがいと楽しさを感じながら成長し続けることのできる事業所として歩み続けていきたいと思います。ぜひ一度遊びにいらしてください。

ポラーノ広場
ご利用者様のステップアップを

主任　新居﨑 敦志

ポラーノ広場は、多機能型事業所（生活介護と就労継続支援Ｂ型）として、阪奈道路沿いの自然に囲まれた環境の中で英国風の建物を改装して２０１３年３月に開所し、来年で10年目を迎えます。生活介護は、「シグナル」という名称で主にクラフト商品の生産を通じた支援を行っており、２年前からは新たに2階ホールも活動の場に加え、商品のクオリティや作業技術の向上を目指して「創作活動」＝「生産活動」となるよう取り組んでいます。

就労継続支援Ｂ型は「シグナレス」という名称で『カフェ＆ベーカリークラムボン』を運営しています。ベーカリーでは、これまで１００種類以上のパンを製造する中でご利用者の方の作業技術が向上し、一部のパンは、生地作りから窯で焼くまでの全工程をご利用者の方々のみで行っています。カフェは近年、新型コロナウイルスの影響で一時的に休業することもありましたが、お客様からの励ましや再開を楽しみにしているとのお声を多くいただき、ポラーノ広場の開所以来、地域の方々にご愛顧頂いた証だと実感しました。

これからも多機能型事業所として多様なニーズを幅広い仕事で受け入れ、法人内の他事業所との連携を更に深め、ご利用者様のステップアップのお手伝いが出来る仕組みを作っていきたいと考えています。

生駒事業所

柔軟に、楽しく、共に成長

主任補　堀口 剛

生駒事業所は、他事業所にはない都市公園内という特殊な環境の下、緑豊かな生駒山麓公園の自然に恵まれたスペースで活動をしています。他府県との県境という立地から、ご利用者さんが奈良だけではなく、大阪の方も多く通所されています。開所以来、ご利用者数は年々増加しており、それに伴い作業内容も多様に変化しています。

今年も新型コロナウイルスの影響を受けながら開園、営業を続けた生駒山麓公園レストラン・厨房は、公園に来られるお客様のニーズに合わせ、提供をテイクアウト用に変更。三密を避け、広い公園内でも自由なピクニックスタイルでレストランメニューを楽しんでいただけるよう工夫しました。売れ行きのよい商品を、多くのお客様により短時間で提供できるよう体制を見直し、提供時間の短縮に繋げました。盛り付けや調理手順を見直したことで、ご利用者がより主体的に調理に携われるようになりました。また難しいソフトクリームの巻きに挑戦し、今は数名のご利用が見事なソフトクリームを作られます！　さらには、ポラーノ広場から製菓部門が移転したことにより、ご利用者の作業、役割が大幅に広がりました。

生活介護事業では、以前は「生活介護班」という名称でしたが、現在は「いろどり班」と名称を改め活動しています。開所当初は、公園内の清掃活動がメインの作業でしたが、今は花苗生産・公園内植栽作業も行い、公園に彩りを添えています。みんなで種から苗を育て、植え、水をやり、育った花苗を広い公園内へ移しかえます。こうした公園の植栽作業はご利用者にとって日々良い刺激になっています。現在「いろどり班」は花苗・野菜の生産数を増やす、雨天時の室内作業の発展・強化に努めています。

就労班は、コロナ禍で減少した売上を補填できるように、製菓班・レストラン厨房班の売上を伸ばす、と同時に宿泊提供で得た食材の加工・製造技術を活かし、法人内の他部署と連携しています。

ご利用者の工賃確保・活躍の機会の拡大、支援の質の向上など、更なる進展を見据え、様々な視点や角度から柔軟な発想・アイディアを出し合ってご利用者、支援スタッフが益々共に成長してゆけるよう取り組んでいるところです。

地域生活支援

一人ひとりが心豊かな生活を

主任　安田 章代

あおはに会で最初のグループホーム『サンフラワー』、『トマトホーム』が２００３年にスタートしてから18年が経ちました。

それから少しずつ増えたグループホームは、現在、奈良市内に全部で11か所あります。

支援学校を卒業されて間もない方から、ご年配の70代まで3世代が揃うホームもあるなど、さまざまな方達が共に暮らしておられます。そのため、ゆったりと過ごせるような家庭的な雰囲気のホーム作りを心掛けています。また、ホームごとにＢＢＱやクッキング・釣り・ハイキングやお誕生日のお祝いなどのイベントもしています。この2年ほどは、コロナ禍のため以前と同じような活動を行うことが困難でしたが、今年の11月に私たちのグループホーム近隣にある『奈良佐保短期大学』の学生さんから福祉フェスタに招待されました。食事会や工作、レクリエーションを通して、学生さんと楽しそうに交流する利用者さん達を見て、人と人との繋がる場の大切さを思い出しました。久しぶりに見る利用者さんの生き生きとした姿に、そして今まで気づかなかった魅力ある一面を発見でき、とても嬉しく感じています。

現在、令和4年春に開所する新しいグループホーム『フローラル　菜畑』の建設が始まっています。これからも、利用者さんたちの日々の生活と健康を支えながら、一人ひとりが心豊かな生活が出来るよう支援していきたいと思います。

放課後等デイサービス 2のあひる

未来へ続く支援

主任　北道 幸吉

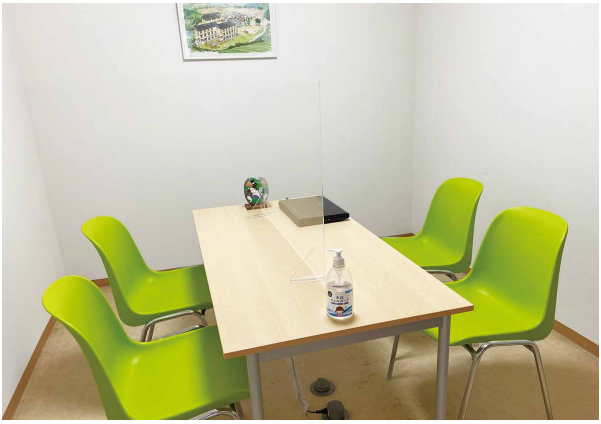
『2のあひる』が開所したのは平成25年、今から9年前になります。それ以前からも青葉仁会では、支援学校に通われる生徒さんを対象に、サマースクールや、「森の学校」という農業体験やアウトドア活動などのプログラムを実施していました。ですので、小学生の時から青葉仁会を、また2のあひるをご利用頂いていたご利用児も、今では学校を卒業し、様々な道に進まれています。法人の設立30周年に比べると、まだまだ若い2のあひるの歴史ですが、一人一人のご利用児の濃厚な歴史に寄り添えているように思います。

2のあひるのプログラムでは、お金の使い方、考え方、そして店舗のレジでのやりとり、アート・創作活動では、ご本人の気持ちを作品で表現したり、見本を見ながら同じものを作ったり、災害避難訓練に非常食体験としてカップラーメンを作って食べたりします。そういった身辺自立の支援に加えて、成人への支援に繋がるよう、就労訓練での作業、例えば紙漉き、木工、製パン、レストランなど青葉仁会にある環境に触れ、「はたらく」ことが身近なものになるようお伝えしてゆきたいと思います。また、ご家族様にも卒業後の進路を不安に思うことなく、その先の進路についても少ない目標からではなく、大きな目標の中から一つひとつできること、やりたいことを共に考え、お子様の進路を決める際には、『2のあひる』での経験をその材料と自信にして頂けたら幸いです。

2のあひるから始まったそれぞれの青葉仁歴を、今後もどんどん刻み込んでいって欲しいと思っています。

奈良西相談支援センター ポラン

課長　殿井 麻美子



私が青葉仁会で相談支援を担当し、7年経ちました。相談支援の仕事は、どの部署でも同じだと思いますが、多岐に渡っています。主なものは、サービス等利用計画の作成、モニタリングによる計画の見直し、社会資源の情報提供、利用事業所との連絡調整、サービス担当者会議の開催、事業所訪問等による状況把握、家族等支援者のサポートです。ただ、利用者様それぞれ背景や持っていらっしゃる資源（ご家族などのサポート体制・経済状況・住環境・利用事業所・支援スタッフなど）が違い、それぞれに必要な支援が違うことから、画一的な相談支援は当然できません。相談支援専門員の力量や経験もそれぞれですので、その相談員によって支援の組み立て方も違ってきます。力不足を感じることがあっても、とにかく経験を積むしか前に進めません。

そうした中で私が心掛けていることを紹介したいと思います。利用者様家族様により投げ掛けられる様々な相談に対して、わからないことでもとにかく当たっていくこと、知識や情報を持っておられそうな方や専門機関にどんどんアプローチしていくことです。大概の人は、「教えて」と聞くと教えてくれます。利用者様に導かれて知識や経験が蓄積され、それが同じ悩みを持つ別の方の為に役に立つのです。それから、現場に足を運ぶこともです。相談室でお話を聴くだけでなく、その場所に行って、五感で理解することに努めます。イメージが膨らみ、理解がより深まります。利用者様やご家族様の何気ない姿から気づきも得られます。そして、支援者やスタッフの力を借りることです。私一人ではできないことでも、別の人はできたりする。その為にも、どんなスタッフがいるか、その人の得意なことは何か、どんな仕事をしてどんな動きをしているか、を把握するようにしています。最後に、相談支援以外の分野についても勉強や理解を深めるようにしています。面談を通して、いろいろな立場の人と話をすること、人生を聴くことで、小さな私の世界が広がります。それが、相談支援のいちばんの醍醐味であって、だから相談支援をやめられないのだと思います。

12年目のAOHANーブルーベリー園より

萌あおはに 生活支援部副所長　田中 祐介

今年も、コロナ禍で迎えた2回目のブルーベリー園を無事に営業、そして閉園することができました。ご来園、ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

今年は実の成りもよく、多くのお持ち帰りもあり、1日の過去最高の売上げを記録することができました。また、ご利用者に「数字」を意識してもらうことを目標とし、ブルーベリーの収穫量をグラフ化したり、朝礼で昨日の売上げの発表を行いました。それにより週末は売上げが多いということも分かり、作業がない休日でも「今日は何人やった?」と気にされるご利用者がおられ、自らが携わっている仕事に対しての高い意識に嬉しく思いました。

そんな中、例年多数のご来園があるお盆期間に続いた長雨の影響は大きく、容赦なく降る雨に「また雨やなー」と、ブルーベリー園を見ながらご利用者と腕を組む日が続きました。県内の果樹園では、水分が多すぎて実が割れてしまい、ここ数十年で一番の不作年といった報道もありましたが、あおはにブルーベリー園は耕作放棄地であった茶畑を再生したブルーベリー畑のため、茶畑によく見られる斜面に植えられていることから、水はけがよく、被害も最小限にとどめることができました。

また、今年は新聞やテレビなどのメディアにも多数取り上げていただき、受付の際に「〇〇を見て来たんです」と来園されるお客様がおられ、反響の大きさを感じています。TOKIOの城島さんや、入所ご利用

者がいつも見ておられる番組のリポーターさんが来られた際は、テレビで見ている方が目の前にいることに信じられないご様子でしたが、すぐにお決まりのポーズやTOKIOの曲を一緒に唄い、楽しんでおられました。

来園された方はお気づきになられたと思いますが、今年度からブルーベリーの摘みとり作業の際に、お揃いのTシャツを着て作業を行っています。暑い日差しのもとでブルーベリーを摘みとる一体感を共有して、モチベーションを上げたいとの思いから導入しましたが、緑のブルーベリー畑にターコイズブルーがよく映えます。そして、コロナ禍以降、居室で過ごされることが多く、作業に出て来られなかったAさんが、嬉しそうにTシャツを見せにこられ、その後、摘みとり作業に毎日参加される嬉しい出来事もありました。

ブルーベリー園の閉園後、今年度の売上げをご利用者に発表した際は「おー」「すごーい」と自然にパチパチと拍手が起こり【100万円】という言葉が持つインパクトをありありと実感しました(笑)。何より、お客様からの「おいしかった!来年もまた来ます!」等のお声は嬉しく、ソーシャル・ディスタンスを保たなければという葛藤と戦いながらも、そろりそろりとお客様に近づいて「いらっしゃいませ!ありがとうございました!」と会話のきっかけをつくるご利用者がたくさんいらっしゃいました。

現在の『自然学校』班では、閉園と同時にさっそく来年に向けての整備が進んでいます。昨年に植え付けた栗も順調に育っており、その他の生育中や開墾中を合わせると、将来的には今の倍以上の耕作面積になり、加えて『あおはにファーム』班との連携も強化していきます。自然学校班では、天候に左右されることが多々ありますが、色々な作業を「自然」を感じながらできる強みもあります。時には雨雲レーダーが予期しなかった急な雨に、猛ダッシュすることもありますが、ブルーベリーの紅葉や周りの木々の落葉(圧巻です)を感じながら、一方で「お昼はラーメンやで!」、「阪神負けたな〜」と、様々なことに一喜一憂しながらブルーベリー園の整備を行っています。

「満天 星めぐり石鹸工房」5年目の春

満天ひろば　主任補　杉本 奈津紀

令和4年4月、『満天 星めぐり石鹸工房』は誕生してから5年目を迎えます。石鹸工房の建設と同時期に化粧品製造販売業許可を取得し、高品質な石鹸製造はもちろん、女性からも男性からも、美しいものを意識される方々の憧れとなる仕事場を目指し、様々な石鹸の製造に取り組んできました。

工房の開所時点にはお一人だったご利用者も今では5名に増え、昨年度はその5名でオリジナル商品、OEM商品(私たちが製造する他社ブランドの製品のこと)を合わせて約1万個も製造することができました。私たちの製造数の大半を占めているOEM商品は、全国の様々な店舗や百貨店、さらにはフランス、スイス、タイにも自然派の高級石鹸として輸出されました。

石鹸づくり、と聞くと華やかなイメージをもたれる方が多いかもしれません。しかし、木箱の形に流し込んだ石鹸は10kgを超える重さで、それが所狭しと工房に積み上げられ、結構な力仕事となります。製造工程のそのほとんどが細かな手作業で行われ、材料の計量から包装まで慎重さと正確さが求められます。

オリジナル商品はもちろんですが、特にOEM商品は製品によって材料の配合から出来上がりのサイズ、包装方法もそれぞれに異なります。お客様からは、仕上がりの品質はもちろん、その製造過程から包装に至るまで、非常に細かな指示をいただきます。そのため、最初はご利用者もスタッフも共に慣れない工程に幾度となく失敗を重ねましたが、今では一人ひとりの役割が明確になり、苦手な作業、得意な作業をそれぞれのご利用者が補いあって、バランスよく協働して作業を進められるようになりました。

ご注文をいただいてから、製造が無事に終わったとき、包装が終わったとき、出荷するとき…その時々に達成感が湧きます。そしてまた、オンラインのショッピングサイトに掲載されていたり、実際に店舗で販売されているところを見学したり、ご自分が製造に携わられた石鹸商品が販売され、購入され、時に人気商品となっているのを見ると皆さんとても感動されます。細分化された目の前の作業に毎日コツコツと取り組む中で、一つ一つの作業が最終的にはどのように社会と、世界の人々と繋がっているのかを、製造されているご利用者にこれからもっともっと感じ取っていただけたらと思います。

支援を通して

青葉仁会が大事にしている3つの柱、〈はたらく、暮らす、余暇〉の「はたらく」を担う場として、ご利用者には何よりも「働くって楽しい!」と思っていただけるよう、石鹸づくりに取り組んでいます。正確さが求められる作業の中で、失敗するとどうしてもその作業に恐怖感を抱かれ、もうこの作業はしたくない!と思われる時もあり、なかなか順調に進まず、納期を思うと焦りを感じる時もあります。ですが、ご利用者との作業においては、口頭での説明や指示だけで済まさず、まず一緒にやってみたり、より作業がすすめやすくなるような治具を作ったり、まさにご利用者と一緒に、製造工程を考え、作り上げています。

作業の細分化、見える化はもちろん、難しい作業は練習する時間も設けています。一つ一つの作業を練習し続けることで、皆さん日々目に見えて成長されています。出荷に間に合わせるために急いでいる時に、「私もやるよ!」と積極的に一緒に進めてくださったり、仕上げる個数が多くても責任をもって最後まで取り組んでくださったりと、みんなで1つのチームとして進めるようになってきたと日々実感しています。

Memoir

おもいで

設立30周年を記念して、あおはに歴もまた30年を超える方々にこれまでを振り返っていただきました。

●法人30年に思うこと

満天ひろば所長・副部長　長谷川 和子

当時、ボランティア団体としてスタートした『あおはにの会』の最初の活動は、都祁村薗生(いう)にあった畑でのサツマイモ栽培でした。真夏に、近くの小川からバケツでくみ上げた水をまき、何とか収穫したサツマイモは、秋に開催された各所でのバザーで販売し活動資金に充てていました。

収穫したサツマイモを乾燥させる場所すらなかったので、職員の住まい兼事務局があったアパートの部屋中に並べていました。それを見て、お隣のFさんが真面目な顔つきで「イモ(芋娘)が芋を掘ったのね!」と私に言われたことがあり、今思い出しても笑いが込み上げます。この隣人のFさんは、看板製作の職人で、バザーなどで「あおはにの会」の活動をアピールするために無くてはならない布製の看板を何枚も製作し、寄付してくださいました。各所のバザーでは当時、自家製のクッキー・和紙工芸品・寄付として頂いた不用品などを販売していました。また、そのバザーで集まり、知り合った方々が、さまざまな形で私たちの活動にもご協力くださり、支えてくださりました。

「私一人ではなんとか生きていけるけれど、社会で苦しんでいる人の力に少しでもなれたら・・・」という多くの方々の想いの代表として歩んできた青葉仁会。現在の法人職員の中にはまだ生まれていなかった、という方もいるでしょうし、30年前の状況は想像もつかないでしょう。今こうして大きくなった組織におさまらず、とどまらず、いつまでも「青葉のようなエネルギーを持った人たちによってたつ」という法人名の意味を失わず、私も果敢にチャレンジし続ける組織の一員でありたいと願います。

●たくさんの浮き輪のおかげ

地域支援部長　高原 和美

今も昔もスポーツには興味なし、大の運動が苦手な私が青葉仁会に出会って何故かカヌーを購入。施設にあるカヌーの台数だけでは数が足りず、職員の自前のカヌーをも持ち込んで始まった「AOHANIカヌー教室」。これがその後、パラマウントチャレンジ カヌー(現在の、一般社団法人日本障害者カヌー協会)へ繋がりました。

同じ頃、アウトドア用品を扱う『アウトドア フォレスト』を奈良市内に開設。販売当日、私は当然ながら商品やアウトドアの知識も薄く、説明もうまくできずしどろもどろに。それを見かねたお客様がわざわざその翌週もお店に来て下さり、ご自身が買われた商品の感想、良さを私に説明してくださいました。この後も、頼りなさに見かねたのか、お店のイベントや店舗での販売を手伝って下さるお客様がとても多く、ありがたいお店でした。

難聴で言葉が聞き取りにくい、信号機の理解や、路線バスに1人で乗れるかどうかわからない、自らの感情を全身全霊で表現される好奇心旺盛なご利用者のIさん。長年過ごされた群馬県の大規模施設から、故郷が奈良ということもあり青葉仁会へ来られることになりました。送り出す群馬の施設スタッフの方も、「Iさんは、最初は『あおはにの家』(入所施設)からかな!」とおっしゃっていました。それなのに、榊原理事長(当時の常務)は当然のごとく、「20年ぶりに、ようやく奈良に戻れるのだから、彼が好きな『奈良駅』に一番近い町のグループホームからチャレンジしてみよう。」と。いや、それよりもまずは入所から新しい生活へと段階を踏んだ方が・・・と渋る私たち職員に、「石橋を叩き過ぎて結局渡れ

ないなら、叩かず渡ってみよう。落ちても泳いで渡りきる体力があればよい。」「日常の中で積み重ねた体力と謙虚さを忘れなければ、たとえ溺れかけても、誰かが浮き輪を投げてくれるかもしれない。」と、叱咤激励を受けました。

その後、ご利用者Iさんは楽々と地域に溶け込み、奈良での、そして青葉仁会での生活を泳ぎ切り、今も、奈良駅近くのグループホームから、木工房『どんぐり山猫工房』へ毎日出勤されています。最高齢ではありますが、誰よりもパワフルに活動しておられます。私はというと、理事長がおっしゃった通り、その都度、たくさんの浮き輪を多くの方々から投げて頂きながら、今も精一杯に泳いでいます。

ご利用者の圧倒的な魅力、ご家族様の強さに裏打ちされた明るさや多くの想いを持った方々との出会いに支えられて、今の私、そして青葉仁会があるのだと、つくづくこの30年を思い返しています。

●働くということ

経理部長　山岡 照代

職員数が増えた今では、理事長のお話を職員全員が聞ける機会は節目の挨拶の時や研修の時だけになりましたが、今よりももっと組織が規模的にこぢんまりしていた頃は、毎月行われる職員会議の中で理事長からのお話がありました。支援のこと、福祉制度のこと、取り巻く社会の動き、そして時には仏教哲学や宇宙の話になることもありました。さまざまな話のなかで、私の好きなお話の一つに「働くこと」があります。「…働くとは、経済活動を超えた生命活動である。お金を儲けるというだけではなく、どう働くかはどう生きるかと直結している。」というお話です。

今、私は生きている最中で、働いている最中でもあります。働くことは自分の人生の多くの時間を占めていて、働くことを目的に集まった人たちと、思いと時間を共有しています。そんな今はとても貴重な時だと思っています。

青葉仁会を職場として選んだ職員にとって、ここがやり甲斐や使命を感じて働ける場所であってほしいと願います。この場から、新しい目標や別の道を見つけられ、去って行かれる人ももちろんあります。そんな方々にも、自分の力を発揮したいと思える場所、役割を果たしたいと思える場所を見つけていただけたら嬉しいです。どこで働いていても、社会のどこかでつながっている気がします。

「働くとは、経済活動を超えた生命活動」、「どう働くかはどう生きるかと直結している」。最初にこれを聞いた頃は、社会で働くということの厳しさを表す言葉という印象を受けていました。しかし、働くことの喜びを知ってほしい、使命感をもてる仕事にめぐりあってほしい、という理事長の願いのこもった言葉として職員に伝えて頂いていたのだと思います。

あおはにファーム キャベツ通信

例年までの作物に加え、今年度、『あおはにファーム』は新たな取り組みをしました。こちらの写真にある畑いっぱいの有機キャベツ栽培です。

昨年春に、大阪でとんかつチェーン店を営業されている『かつ辰』様より、お客さまに安心して食べていただける美味しいキャベツを！ と依頼を受けたのが始まりです。これまでも、青葉仁会の飲食店で提供する程度の量は栽培していましたが、人気とんかつ店のキャベツとなると比較にならない量です。カラッと揚がったとんかつに、歯応えのある甘いキャベツの千切りは言うまでもなく名脇役。その責任がどんと私たちの肩に乗った思いでした。

種をまき、丁寧に苗を育てて畑に定植。キャベツ、特に農薬や化学肥料を使わないで育てられたキャベツは、大和高原のグルメな虫にとってもご馳走です。暖かい季節になるとキャベツに付く青虫を、ご利用者が毎日必死でとってくださいました。また、旬の時期だけでなく、年間を通して納品するため、夏の蒸し暑さや冬の寒さに弱いキャベツの葉の劣化に苦戦しました。

これまで出荷したキャベツは1,300kg以上。併せて、4,500kg以上のコシヒカリも納品しています。肝心のお味ですが、キャベツの甘みと鮮度に対してお客さまからはご好評をいただいています。コロナ禍、大阪まで外食に行き辛い状況ですが、感染が落ち着いたら、私たちが栽培したキャベツの活躍ぶりをみんなで味わいに行くことを今から楽しみにしています。

あおはにファームのキャベツは「かつ辰・四條畷店」で、コシヒカリは「かつ辰・交野店」でそれぞれ扱っていただいています。

子どもたちを笑顔に

NPO法人Deep People様が受託された、令和2年度国産農林水産物等販路多様化緊急対策事業を活用した[フードスマイリング事業]を通じて、近隣府県の「子ども食堂」131施設、24,863人の子どもたちに青葉仁会の就労生産品をお届けしました。

青葉仁会からの提供は、ベーカリーカフェ・クラムボンの3種類のパン詰め合わせ：680セット、デリカテッセン・イーハトーヴのAOHANIカレー：約3万食、生駒事業所のお菓子工房のパウンドケーキ：約3千個。

そして製造だけでなく、これらたくさんの商品の包装・発送業務はクラムボンのご利用者が担ってくださり、それぞれの事業所が力を合わせて達成できました。

こうして「美味しい！」が生みだす子ども達の笑顔、青葉仁会の作り手・ご利用者の笑顔に確実に繋がっています。只今、新たな「子ども食堂」へ商品をお届けするために、それぞれの事業所にて生産が進められているところです。

あおはにの風

題字

あおはにファーム
Mさん

いつもは屋外での農作業で汗を流すMさん。最近は黒米の選別、サツマイモの仕分けやじゃがいもの種芋づくりなど、仕事を選ばずどんなことにも一所懸命に取り組まれマルチに活躍されています。お正月の書初めで見たMさんの力強い文字にほれ込んだ制作担当から、是非この記念号の題字を、とお願いしたところ大変張り切って制作してくださいました。

表紙

河津桜

あおはにの家・萌あおはにをその敷地内に擁する杣ノ川の青葉仁会本部。建物に面した広場では3月下旬から4月初旬にかけて河津桜が見ごろとなります。ソメイヨシノより少しだけ早く開花するこの桃色の花が綻ぶのに気づくと、今まで漠然とは感じていた春の訪れが形になったようで、奈良市内より気温の低いこの土地にもいよいよ春がやってきたのだと実感します。

新規グループホーム「フローラル菜畑」がもうすぐ開所します

令和4年6月、青葉仁会では12番目となるグループホームが生駒市に誕生します。二階建ての日中サービス支援型ホームには、合計22の居室（ショートステイ含む）、また、二階へスムーズに上がれるよう、エレベーターが設置されています。

2年前に完成したグループホーム「ブロッサム菜畑」に隣接し、近隣にはスーパーやドラッグストア、飲食店もあり、駅にも近いことから、より充実した地域生活を送ることができるように、外出や余暇活動などの支援を実施します。

編集後記

何気なく舗装道路の脇に控えめに咲く野の花に気づき、肌寒さの中にも春の訪れを感じます。

数年前のことです、ご利用者がどこで摘まれたのか、青々としたクローバーの葉を「はい！」と私に手渡してくださりました。四つ葉かな、と期待しながらよく見ると、葉は三つ。正直少し残念に思いながら頂きましたが、ご利用者はとても嬉しそうに、もう一つ持っておられたクローバーの葉をご自身のエプロンに付けている名札に挟んでおられました。

その日、店内でお食事をされていたお客さまが、ご利用者の胸のクローバーに気付かれ「四つ葉かな？」と聞かれました。皆さん思う事は同じだな、と隣にいた私が何か言わなくては…と思っていたその時、お客さまが「三つ葉か～」、「幸せの一歩手前、もうすぐや！」とおっしゃいました。ご利用者はニッコリと照れ笑いされていたのを覚えています。

長引くコロナ禍、感染防止対策として青葉仁会の飲食店も休業、または密な接触を避ける為にテイクアウト形式のみでの営業に変更しています。お客さまとの関わりが大好きなご利用者さんにとっては、さぞ物足りない事でしょう。

人と人との関わりがより一層密になる日まで、あと少し、今が一歩手前であることを願っています。

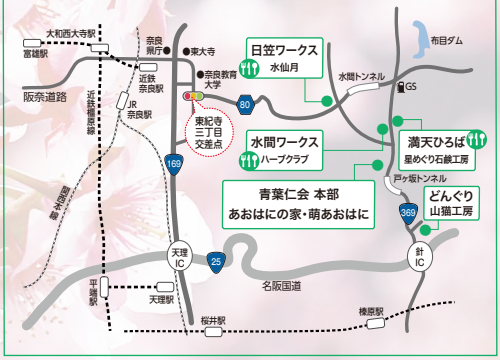
編集責任　榊原 安美

HUMAN SPIRITS
SINCE 1991
AO・HANI
Social Welfare Organization
AO・HANI Nara City Japan

社会福祉法人 青葉仁会

〒630-2152 奈良市杣ノ川町50番地の1　TEL.0742-81-0420　FAX.0742-81-0804
info@aohani.com　http://www.aohani.org

奈良市東部エリア すこやかネットワーク



あおはにの家・萌あおはに
〒630-2152 奈良市杣ノ川町50番地の1
TEL.0742-81-0824　FAX.0742-81-0804

水間ワークス
〒630-2151 奈良市水間町3020-3
TEL.0742-81-0864　FAX.0742-81-0829

日笠ワークス
〒630-2173 奈良市日笠町396-2
TEL･FAX.0742-81-1071

満天ひろば
〒630-2151 奈良市水間町3031
TEL.0742-81-1310　FAX.0742-81-1311

どんぐり山猫工房
〒632-0113 奈良市都祁馬場町 716
TEL･FAX.0743-89-1808

奈良市西部エリア いきいきネットワーク

デリカテッセンイーハトーヴ
〒630-0064 奈良市帝塚山南4丁目11-14
TEL.0742-95-7227　FAX.0742-95-7228

ポラーノ広場
〒631-0061 奈良市三碓町2146-2
TEL.0742-45-8700　FAX.0742-45-8701

生駒事業所
〒630-0243 生駒市俵口町2088
TEL.0743-73-8880　FAX.0743-73-5350

地域支援部
〒631-0064 奈良市帝塚山南4丁目11-10
TEL.0742-81-8877　FAX.0742-81-8660

青葉仁会の各事業所から主要駅まで送迎バスを運行しております。(乗車時間約30分)
JR・近鉄奈良駅、富雄駅、東生駒駅、生駒駅、高の原駅、新祝園、州見台方面、学研奈良登美ヶ丘駅
天理駅、榛原駅、桜井駅、大和小泉、法隆寺、王寺方面 、忍ヶ丘、住道、四條畷方面